宮に初めて参りたるころ

名前（　　）　日づけ（　／　）　できた数（　／28）

使い方　本文を声に出して読んでから、傍線の番号を手がかりに解きます。**この段の山は、作者から中宮定子への敬語（謙譲語・二重敬語）、「え〜まじ」「なむ」の文法、そして「葛城の神」にこめた中宮の機知**です。

範囲＝作者が夜だけ参上していたころの場面から、女官たちが笑って帰るところまで。

あらすじ＝宮仕えを始めたばかりの作者は恥ずかしくてたまらず、夜だけ参上して几帳の後ろに控えている。中宮定子は絵を見せて話しかけてくれるが、作者は手も出せない。灯火に照らされた中宮の美しい手を見て、こんな方がこの世にいらっしゃるのかと見とれる。明け方、早く下がろうとする作者を、中宮は「葛城の神もしばし」とからかって引き止め、格子を開けようとする女房にも「まな」と言って止める。

一　次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

宮にはじめてまゐりたるころ、もののはづかしきことの数知らず、涙も①落ちぬべければ、夜々（よるよる）参りて、三尺の御几帳（みきちやう）の後ろに②候（さぶら）ふに、絵などとり出でて③見せさせたまふを、手にても④えさし出づまじう、⑤わりなし。「これは、とあり、かかり。それか、かれか。」などのたまはす。高坏（たかつき）に参らせたる御殿油（おほとなぶら）なれば、髪の筋なども、なかなか昼よりも⑥顕証（けそう）に見えてまばゆけれど、⑦念じて見なす。いと冷たきころなれば、さし出でさせたまへる御手のはつかに見ゆるが、いみじう⑧にほひたる薄紅梅（うすこうばい）なるは、限りなくめでたしと、見知らぬ里人心地（さとびとごこち）には、⑨かかる人こそは世におはしましけれと、⑩おどろかるるまでぞ、⑪まもり参らする。

暁には⑫とく下（お）りなむといそがるる。「⑬葛城（かづらき）の神もしばし。」など仰せらるるを、⑭いかでかは筋（すぢ）かひ御覧ぜられむとて、なほ伏したれば、御格子（みかうし）も参らず。女官（にようくわん）ども参りて、

「これ、放たせたまへ。」など言ふを聞きて、女房の放つを、「⑮まな。」と仰せらるれば、笑ひて帰りぬ。

語注　宮＝中宮定子。一条天皇の后。まゐる＝参上する。もののはづかし＝なんとなく気おくれがする。三尺の御几帳＝高さ約九十センチの几帳。几帳は、台に立てた柱に布を垂らした間仕切り・目隠しの道具。とあり、かかり＝ああで、こうで（絵の説明をしているさま）。高坏＝脚の高い台。その上に灯火を置いた。御殿油＝宮中でともす灯火。なかなか＝かえって。まばゆし＝まぶしい。まぶしいほど気恥ずかしい。はつかなり＝ほんのわずかだ。薄紅梅＝うすい紅梅色。めでたし＝すばらしい。里人心地＝宮仕えに慣れていない、宮中の外（里）の者の気持ち。おどろく＝はっと気づく。目がさめる。暁＝夜明け前のまだ暗いころ。とく＝早く。下る＝御前から自分の部屋（局）に下がる。葛城の神＝大和国の葛城山の神（一言主神）。顔が醜いのを恥じて、夜しか働かなかったという伝説がある。筋かひ＝斜め。はすかい。御格子参る＝格子をお上げする。女官＝宮中で雑用をつとめる女性の役人。女房＝宮中に部屋をもらって仕える女性。作者もその一人。放つ＝（格子を）開ける。※「まな」は、本によっては「待て」となっている。

宮に初めて参りたるころ

A　語句の意味と読み（1〜6）

（1）⑤「わりなし」の意味を書け。

（2）⑥「顕証（けそう）に」の意味を書け。

（3）⑦「念じて」の「念ず」の、ここでの意味を書け。

（4）⑧「にほひたる」の「にほふ」の、ここでの意味を書け。

（5）⑪「まもり参らする」の「まもる」の意味を書け。

（6）⑮「まな」の意味を書け。

B　文法（7〜12）

（7）①「落ちぬべければ」の「ぬ」と「べけれ」の文法的意味を、それぞれ書け。

（8）③「見せさせたまふ」の「させ」の文法的意味を書け。また、「させたまふ」のように尊敬の語を重ねた形を何というか。

（9）④「えさし出づまじう」の「え〜まじ」はどのような意味を表すか。また「まじう」はどのような形か。

（10）⑨「かかる人こそは世におはしましけれ」の「こそ」の結びの語とその活用形を書け。また、「けれ」の文法的意味も書け。

（11）⑩「おどろかるる」の「るる」の文法的意味と活用形を書け。

（12）⑫「とく下（お）りなむ」の「なむ」を文法的に説明せよ。

C　主語・指す内容・敬意の方向（13〜17）

(13) ②「候（さぶら）ふに」の「候ふ」の敬語の種類と、誰から誰への敬意かを書け。

(14) ③「見せさせたまふ」の動作の主は誰か。また、誰から誰への敬意を表しているか。

(15) ⑪「まもり参らする」の「参らする」の敬語の種類と、誰から誰への敬意かを書け。

(16) ⑬「葛城（かづらき）の神もしばし」は、誰が誰に向かって言った言葉か。

(17) ⑭「いかでかは筋（すぢ）かひ御覧ぜられむ」の「られ」は受身の助動詞である。誰が誰に「見られる」ことを言っているのか。

D　口語訳（18〜21）

(18) ④・⑤をふくむ「絵などとり出でて見せさせたまふを、手にてもえさし出づまじう、わりなし」を口語訳せよ。

(19) ⑨・⑩・⑪をふくむ「かかる人こそは世におはしましけれと、おどろかるるまでぞ、まもり参らする」を口語訳せよ。

(20) ⑫をふくむ「暁にはとく下（お）りなむといそがるる」を口語訳せよ。

(21) ⑭をふくむ「いかでかは筋（すぢ）かひ御覧ぜられむとて、なほ伏したれば」を口語訳せよ。

E 内容・記述（22〜25）

（22）①「落ちぬべければ」とあるが、作者が昼ではなく「夜々（よるよる）」参上していたのはなぜか。本文に即して書け。

（23）⑥「顕証（けそう）に見えて」とあるが、夜なのに、かえって昼よりもはっきり見えたのはなぜか。また、そのとき作者はどのような気持ちだったか。

（24）⑬「葛城（かづらき）の神もしばし」には、中宮のどのような気持ちがこめられているか。「葛城の神」の言い伝えにふれて書け。

（25）⑮「まな」と中宮が言ったのはなぜか。中宮の心づかいにふれて書け。

F 文学史（本文全体をふまえて答える）（26〜28）

（26）この文章の出典『枕草子』の作者名と、成立した時代、文学のジャンルを書け。

（27）本文の冒頭の「宮」とは誰か。どのような人物かもあわせて書け。

（28）『枕草子』の章段は、ふつう三つの種類に分けて説明される。三つの種類の名前を書き、この文章がどれにあたるかを答えよ。

【テスト直前チェック】この三つ　❶傍線の敬語はどれも「作者から中宮へ」。②「候ふ」⑪「参らする」は謙譲語、③「見せさせたまふ」や「仰せらるる」は二重敬語（最高敬語）。動作をするのが誰かを先に確かめる。 **❷「なむ」は上の語の形で見分け、形が同じなら意味で決める。**⑫「下り」は上二段活用で未然形と連用形が同じ形。作者が自分で「早く下がろう」と思っているので「ぬ（強意）＋む（意志）」＝「下がってしまおう」。他への願望「〜してほしい」では通らない。 **❸「葛城の神」は夜しか働かなかった神。**⑬は顔を見られたくない作者を中宮がやさしくからかう言葉。⑮「まな」とあわせて、中宮の心づかいを記述で書けるようにしておく。

▸ 古文・漢文の参考書のおすすめ（楽天・Amazonのリンクつき）　kotennosennsei.com/koten-kyozai-review/　▸ 解説記事にもどる